眠り姫を起こさずに

今生康宏

眠り姫を起こさずに

「……俺たち、これで恋人になった、んだよな」

昨日、俺は思い切ってさくらに告白した。……今までは俺が引っ張っていってやってるだけ。あいつが危なっかしいから、俺が守ってやろう、そう思っていたのに。

あの日……さくらが当然のことのように、自分ひとりで進路を選ぼうとした時。

俺はどうしようもない疎外感を覚えて、おかしな話だというのに、勝手に裏切られたような気持ちになっていた。

一度もそんな話をしていない。俺が勝手に、これからもずっとさくらと俺は一緒の道を進むんだろうと思っていて。どうやらさくらはそういうつもりじゃないと聞いて……怖くなった。

あいつが一人になるのが危なっかしいからじゃない。……俺があいつを失うのが怖くなったんだ。

だから俺は引き留めたいという一心で、告白をした。こんなこと、今まで一度も考えたことなかった。それでも、今この瞬間に芽生えたこの気持ちに正直にならないと、俺は彼女を永遠に失ってしまった気がしたんだ。

「ありがとう、コー君。わたしもねぇ、コー君のことすっごい好きだよ」
なんてことない、友達に向ける言葉のように言ったさくら。だが、意味がわかっているかと聞き直しても、さくらは笑って「わかってるよ」と言った。
そうして、俺たちの関係は変わった。それまでと比べて、劇的に変化した。
……はずだったが、まあ、あのさくらがそこまで露骨に態度を変えるはずがない。朝からいつも通り眠そうな顔をしていて。
で、いつものように昼休みには一人でちょこちょこと行ってしまった。
恋人になったからって、女子と一緒に昼飯を食えるはずもない。仲間内で食った後、二つあるさくらの行きそうな場所の候補の内、天文部の部室を選んで行った。
もう一つの候補は隣のクラスだが、今日は違う気がした。
「んぅっ……んっ、すぅっ……」
「……やっぱりな」
天文部は本来、昼休みに集まるようなことはない。ただ、さくらはよくこの部室を自分の昼寝部屋として使っている。
椅子に座りながら机に上半身を投げ出し、気持ちよさそうに眠っているところを起こしてやるつもりはない。ただ、その寝顔をじっと見つめている。それだけだ。
「……可愛いな」

なんて、本人には中々伝えられない言葉をつぶやいてみたりする。
さくらはまあ、はっきり言ってめちゃくちゃ可愛い。いつも寝ぼけているようなやつだけど、女子としては限りなく魅力的っていうか……他の女子にはない可愛さがあって。その魅力に俺は心を奪われていると言っていい。……本人には言わないけど。
「しっかし、毎度よく寝てるな」
さくらはよく寝るくせに、毎回毎回の眠りが恐ろしく深い。他のクラスメイトが喋りまくっている教室でも問題なく寝れるし、耳元で大声を出されても起きないというのは検証済みだ。
「……触ってみるのはどうなんだろうな」
今までそんなことを試そうとは思わなかったのに、ふとそんな好奇心が湧いた。
いくら、さくらが幼馴染とはいえ、少なくとも胸が大きくなり出してからは……滅多なことでは体に触れなくなっていった。
まあ、そりゃ当然だろう。昔から一緒にいるというだけで、異性の体に触れていいということにはならない。……だけど、もうただの幼馴染じゃなくて、恋人、だからな。彼女の体に触れるのは、そう不思議なことじゃないはずだ。たとえ相手が眠っていたとしても。
「……」
ちょんっ、と肩に触れてみる。しっかり叩くというほどじゃなく、軽く指先でつつくだけだ。
予想していた通り、さくらはまるで反応を寄越さない。……いや、というより。

「（ちょっと触っただけなのに、こいつの体ってどんだけふわふわなんだよ……）」
別に柔らかい肉の付いている場所じゃないはずの肩なのに、びっくりするほど手に返ってくる感触が柔らかく、それだけでドキドキしてしまう。
まるで猫みたいな触り心地だ……強く握れば手からすり抜け、どこかに行ってしまうような。そんな危うさが未だに感じられる。
だが。いや、だからこそ、もっと強く触ってみたい。しっかりとその柔らかさを感じたい、なんて思ってしまう。
「……さくら」
「んっ……ふぁぁっ……」
「やべっ、起きたか……？」
つん、と頬に触れてみると、わずかにさくらが声を発した。だが、起きてしまった訳ではなく、ちょうど寝息を立てただけだったらしい。
……それにしても、頬はぷにぷにだ。別に太ってる訳じゃないのに、ここまで柔らかいなんてな。
というか、さくらは身長も高くはないし、全体的に細すぎだ。……一部を除いて。
そんなに食う方じゃないし、こんなので大丈夫なんだろうか、と心配にすらなる。
「しかし、なぁ……」

とにかく細いさくらだが、一箇所だけ、どうしても目に留まってしまう。
今は季節的に厚着だから、そこまで目立つ訳じゃないが、夏場なんかは特に目立つ胸。今はうつ伏せなのもあって、重力のせいで更に大きく見える。……んだろう。
何分、この体勢だとほとんどその部分が見えない。だが、どうしてもその部分に触ってみたい、という邪な気持ちが生まれてしまった。
「ちょっと失礼するぞー……」
少しだけ椅子を引いてやる。もちろん、体勢が大きく崩れないように、慎重に少しだけ。
すると、机に押し付けられていた胸が、宙に吊り下げられる形になる。
……このまま後ろから抱きしめるように手を回せば、胸を揉んでやることができる訳だ。
だが、そんなことをしていいのか？いや、確実に起きるだろう、という気持ちもある。しかし、それに相反するように、ここまでぐっすり寝ているさくらがそれぐらいで起きるだろうか？という気持ちもあって。
そもそも、だ。これだけ大きな胸をちょっと揉んだぐらいで起きないだろう。そんなに敏感じゃないだろうし、乳首を避けて揉めば、きっと……。
「よ、よし……」
結局、勝ったのは揉んでもいいだろう、と思う俺だった。
優しく手を伸ばし、むぎゅっ……と抱え込むように揉みしだく。

「んふっ……ふっ……」
「……！」
さくらの声に、息が止まる。だが、起き出す様子はない。そして、緊張する一方で、手のひら全体で感じられたのは柔らかい……クッションなんかを掴んだ時よりずっと心地いい感触だった。
不思議と、相手が寝ているせいか、いやらしい気持ちよりも癒やされるような……優しい気持ちになれる。
のんびりした幼馴染が持っている、そこだけ不釣り合いに大きな。女らしいいやらしさに溢れていると思っていた胸。……だけど、さくらはどこまでいってもさくらなんだろうな。
寝ている彼女の胸を揉むっていう、とんでもなくいやらしい体験をしているはずなのに。……今の俺はきっと、ほっこりとした笑顔になっている。
「……降参だよ、さくら」
胸から手を離し、体勢も戻してやる。
「んくっ……すぅっ……」
「まだ寝てやがる」
可愛らしい寝顔を見ながら。じんわりと自分の胸が熱くなり、鼓動が早くなっていくのを感じた。……後から興奮しているなんてな。

今日のところはこれだけで勘弁してやるけど、次はいっそ仰向けにさせてやって、胸を使わせてもらうか。……なんて考えたりした。

「……じゃあな。次の授業に遅れるなよ、眠り姫さん」

背中を向けて部室を出ていく。

ちなみに五時間目、ちゃんとさくらは間に合っていた。アラームをかけたりしてる訳じゃないはずなのに、器用な寝方してるもんだ。

眠り姫を起こさずに

２０２１年　８月１１日　初版

奥　付

著者　今生康宏
URL　https://wedgewhite.com
E-Mail　konjyoyasuhiro@gmail.com

本書の無断複製、複写、転載を禁止します。
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
(http://tokimi.sylphid.jp/)